

熱川温泉病院 石川 桂子(看護部長)

- 功 績** 今年の納涼祭及び病院祭で出し物の寸劇を企画から演出まで全てを一人で担当。職員を巻き込みながら患者さんが楽しんで頂ける催し作りに大きく貢献した功績。
- 推 薦 者** 岡田 博人 (マネージングディレクター)
- 推 薦 理 由** 納涼祭と病院祭で私も含めた管理職出演による寸劇を出し物として披露しましたが、その企画・脚本・演出・美術を一人でこなしたのが看護部長の石川です。初めての試みでしたが、彼女が積極的に動き、我々出演者を纏めてくれたお陰で面白い劇に仕上がりに、患者さんに楽しんで頂くことができました。また、職員にも一つの目標のために多部署が協力して成し遂げる姿勢を示すことができたと思いますので、理事長賞にご推薦申し上げます。

内 容

石川は今年4月に入職したばかりで「納涼祭」「敬老の日・病院祭」は初めての体験でした。出し物を依頼され「コロナ禍でも患者さんに喜んでもらいたい」「職員で協力し合っているものをやりたい」との思いで、イベントでは初となる各部署の管理職12名出演による寸劇を披露することを提案しました。

7月の納涼祭は昔話の「桃太郎」。桃太郎役の田所院長を始め、出演者が各々用意した衣装（桃太郎・お爺さん・お婆さん・鬼・犬猿雉）で演じました。鬼=コロナウイルスと見立てた劇でしたが、普段と違う出で立ちとコミカルな演技を楽しんで頂きました。

次いで9月の病院祭で披露した時代劇「水戸黄門」では岡田ディレクターが主役の黄門様を演じ、お供の助さん格さんらと村人を虐げる悪代官を懲らしめる様子は患者さんの笑いを誘っていました。また石川が製作した舞台上の背景の土蔵、岩風呂や小道具の千両箱も凝った造りで劇の雰囲気盛り上げるのに一役買っていました。

当初、石川から寸劇の企画が提出された際、管理職のなかには恥ずかしい気持ちや戸惑いもありました。しかし、忙しい業務の合間に脚本を練り、直前の通し稽古で熱心に指導する姿をみて、進んで衣装の提案をしたり、セリフのアドリブを考えたりと皆で良い作品を作ろうと気持ちが変化したそうです。

劇の最後は出演者全員による「マツケンサンバ」ならぬ「熱川サンバ」を賑やかに踊って締めくくりましたが、息もぴたりと合って患者さんから大きな拍手を頂きました。石川は院長、ディレクターを始め協力してくれた職員の皆さんに対し、感謝の気持ちで一杯になったそうです。

